

近況の報告

山本 研二郎

家内が日常の家事をこなすのが困難になって来たので、息子が家の近くに新築された老健施設を購入してくれた。

3階建て、1階は事務室、大きい食堂、風呂場2つからなり、2階と3階は個室。我々は3階の6号室に家内、7号室に私が入っている。部屋は洗面所2か所、トイレ(大きい。車椅子が入れるようになっているからか)、大型のベッド、机、テレビ、冷蔵庫など。窓が大きいので明るい。

朝は7時になると電話がかかる。朝食に降りてくるようにと。ちょっと早い、朝食はトーストと卵焼き、小さい果物。11時半になると食事の知らせ。ご飯の硬さは良いが、おかずはぱっとしない。4時半に夕食の電話。慣れるまでは早いのでびっくり。8時頃には部屋の冷蔵庫を開けてなにか探す。果物、おかし、缶詰、明治のチョコレートは必需品。夕刊2種類を見て、パジャマに着替え、テレビを見て11時にはベッドへ入る。

火曜日にはロータリークラブの例会があるので天王寺の都ホテルへ出かける。12時半から食事、40人程の集まりで30分の講話、1時半に解散。このあと天王寺のデパートで買物。一果物、お菓子など。部屋に帰って冷蔵庫に入れる。事務所へもおすそ分け。

金曜日は毎週ではないが肥後橋の朝日会館へ講演を聴きにいく。帰りに南海高島屋の食堂で食事をするのが楽しみ。

以上、年齢の割には(1927年3月生まれ)元気にしています。読み返すと食べることばかりですが、まあ良しとするか。

今年は平成最後の年で、令和元年でもあります。四天王寺大学にお世話になり 6 年目です。四天王寺大学・短期大学部の学長を務めて 2 期 4 年目になります。学長になり看護学部看護学科の設置と看護学研究科の設置を行いました。約 20 年前に大学院重点化という波に押されて大学院再編を行い、文部科学省に設置認可申請をした経験が大変役に立ちました。看護学部の認可申請を平成 30 年 3 月に行い、同年 8 月に認可され、平成 31 年 4 月に多くの皆様のご協力を得て無事に開設できました。さらに、続けて平成 31 年 3 月に看護学研究科の設置申請を行い、令和元年 8 月に認可され、令和 2 年に開設されます。洽楽会の先生方にも色々とお世話になり有難うございました。私立大学では、学部、学科の新設、再編、組織変更などが頻繁に行われます。まるで百貨店の季節ごとのセールのようなのです。時流に乗り学生募集を続け、入学定員を維持し続けなければ、あつという間に定員割れとなる現実があるからです。

私立大学は、国公立大学とは色々な面で全く異なります。医学部付属病院を持つ私立大学では病院からの収入が大きなウエイトを占めていますが、多くの私立大学の財政基盤は約 90～95%が授業料で、文部科学省からの補助は 5%程度で賄われています。その中の人件費は約 50%で、教育研究費と管理経費が約 33%程度です。定員を充足している私立大学の経営は問題ないと思います。ただ看護学部を新設して分かったことですが、学生数に比し教員数が文系の他学部と比較すると非常に多いことから人件費がかさみ、完成年度（4 年後）には単年度収支は黒字になりますが、投下資本を回収するのに 10 年以上かかります。私立大学は文部科学省の許認可行政の縛りに翻弄されております。加えて英語の 4 技能評価に民間試験導入の延期を決めたことなどの入学試験制度の変更によるゴタゴタ、令和 2 年 4 月から始まる就学支援制度の授業料等減免制度と給付型奨学金制度の対応に追われております。文部科学相の諮問機関である中央教育審議会からのお達しには今まで聞いたことも無かったカタカナ文字が多くあります。欧米諸国の例を参考にして我が国用にマイナーチェンジして下々にお達しをする訳本文化が大手を振っているのが教育界です。明治以降すでに 150 年以上を経ても体質はなかなか変わらないもののようです。

ちなみに皆さん下記の言葉をご存知でしょうか

・三つのポリシー

3P ; Admission Policy, Curriculum Policy, Diploma Policy を各大学は定めることが最近になり義務づけられています。つまり、Diploma Policy はどのような人材を育て上げるのか、Curriculum Policy はそのためにはどのような教育をするのか、Admission Policy はその教育を受けるにふさわしい人材をどのようにして選抜するのかです。当たり前のようでなかなか難しい内容です。医学部のように Diploma Policy が明確な学部は簡単ですが、文系の学部は得てして抽象的で包括的になりがちで、何でも有のようになってしまい特色が無くなります。特色が無いと受験生から見て、自分の卒業後が見えないことになってしまい、その大学・学部を選ぶメリットが見えなくなり、志願して頂けません。これでは、私立大学の経営が成り立ちません。無い知恵を絞って日々刷新中です。

・学修成果の可視化

大学で学んでいる過程での学びの成果を、本人を含めて他に人にも分かるようにすることです。今までのような授業科目の評価に加えて、三つのポリシーに沿って、それぞれの到達目標をどの程度身に付けたかを数値やグラフで示そうという試みです。確かに、学生が大学生活を過ごす中で自分の成長を継続的にわかれれば非常に良いことと思います。しかし、社会人基礎力がどの程度身に付いたか、課題発見能力が身に付いたか、改題解決能力が身に付いたか、グローバル化対応能力はどうかなど、全てどの様に教え、どの様に評価して可視化するかなどは、手探りでその方法を模索中です。首相官邸主導の教育再生実行会議が、平成25年にかっこ良いことをぶち上げています。その一部によると

【大学は、課題発見・探求能力、実行力といった「社会人基礎力」や「基礎的・汎用的能力」などの社会人として必要な能力を有する人材を育成するため、学生の能動的な活動を取り入れた授業や学習法（アクティブラーニング）、双方向の授業展開など教育方法の質的転換を図る。また、授業の事前準備や事後展開を含めた学生の学習時間の確保・増加、学習成果の可視化、教育課程の体系化、組織的教育の確立など全学的教学マネジメントの改善を図るとともに、厳格な成績評価を行う。国は、こうした取り組みを行う大学を重点的に支援し、積極的な情報公開を促す。企業、国は、学生の多彩な学修や経験も評価する。】この政府が出した答申を見て、今までは、企業が自社に合う新卒者の教育を行ってきたが、余裕がなくなったので大学に押し付けてきた側面もあります。また、だれでも成績に関係なく卒業できる義務教育と高等学校教育の付けを大学に回してきたのではないかと疑います。

・ファクトブック（Fact Book 実情調査書）

多くの企業では、事業所の所在地、大株主の状況、役員、組織、従業員の状況、中長期計画、連結・単独業績、商品など株主に対するもろもろの事実を公表しています。大学版として、すでに欧米の大学には University Factbook というものがあり公表されています。最近になり文部科学省が、国公立大学を手始めに私立大学にも作成し公表することを求めています。大学の教育・研究・財務などに関するデータをまとめたものです。具体的には、学生数、入学志願者数・志願倍率、入試別入学者数、卒業者数、留年者数、中途退学者数、留学生受入数、収容定員充足率、入学者数・入学定員充足率、進路別卒業者数、最低在学年限超過学生数、編入学者数、進学・就職状況、学生支援、地域連携、科学研究費補助金採択状況、専任教員数、専任教員男女比数、専任職員数、財務基盤、運営状況、施設、などを見やすい表やグラフに整理公表するものです。受験生をはじめとして多くの人たちが、このデータ集を使って大学間で比較検討することが可能になり、結果として大学間の競争が促進されます。

・ガバナンスコード

2020年度から大学はガバナンスコードを作成し公表することが求められています。そもそもガバナンスコードとは何ぞや。平成26年6月に閣議決定された『日本再興戦略』改定2014-未来への挑戦-で、主要施策例として企業統治の強化の一環として、2015年に金融庁と東京証券取引所が上場企業向けに「コーポレートガバナンス・コード」を示したものです。国立大学が法人化され、上場企業並みに大学版ガバナンスコードの制定を求められ、続いて私立大学にも及んだ結果です。私立大学の例を示します。基本原則1～5があり、公表されたガバナンスコードに従って教学が行われていくことが求められます。

1. 私立大学の自主性・自律性（特色ある運営）の尊重
2. 安定性・継続性（学校法人運営の基本）
3. 教学ガバナンス（権限・役割の明確化）
4. 公共性・信頼性（ステークホルダーとの関係）
5. 透明性の確保（情報公開）

・ラーニングコモンズ

図書館機能と ICT 機能を強化した学生の自習室を充実して学生の自主的な学修を強化し、支援する場所です。大学はこのような部屋を作成し提供することで学生の自己学習を支援しています。

・ICT利用

ICT とは、「Information and Communication Technology」の略称で、「情報伝達技術」と訳されます。IT とほぼ同義ですが、ICT では情報・知識の共有に焦点を当てており、「人と人」「人とモノ」の情報伝達といった「コミュニケーション」がより強調されています。

・PROG (Progress report on Generic Skills)テスト；株式会社リアセックが行っているテストです。大きく2つの要素で判定しています。1つ目はリテラシーで、新しい問題やこれまで経験のない問題に対して知識を活用して課題を解決する力です。二つ目はコンピテンシーで、周囲の状況に上手に対応するために身に付けた意思決定・行動指針などの特性です。この2要素で、社会人基礎力を測定し数値化したものです。入学時にテストをして学生本人に提示して、今後の学修に役立てて頂き、大学生は3年時に、短期大学生は2年時に再度テストをして自分の成長度を確認して、更に卒業までの修学に役立てて頂こうとする試みです。本当にそんなことが分かるのかという疑問もありますが、大変面白く興味のあるテストです。出てきた結果を見て、学生本人も教員も首をひねることもあります。ただ、我々教員が気づいていない側面が評価されていることも多くあります。今後時間をかけて経過を検討していくことになります。

その他にも色々な用語があります。・eポートフォリオ、・ルーブリック、・GPA (Grade Point Average) などですが、面白くないと思いますのでまたの機会にいたします。



今年のできごと

富田 修平

令和の年号になり初めての洽楽会誌となります。これからも洽楽会会員の皆様の近況を連絡し合う交流の場としてこの会誌を活用していくことができればと考えています。引き続き皆様のご理解ご協力を賜りたくお願い申し上げます。

早速、今年も教室のできごとについて述べたいと思います。まず教室員の転入出について。ご存知のように薬効安全性学の三浦克之先生が定年に伴い退任されました。35年の長きにわたり大阪市立大学、薬理学教室の支柱の一人としてご活躍され、多くの人材を育成することで洽楽会にも大きく貢献されました。本当にお疲れ様でした。ご退任後、石切生喜病院で治験関連の仕事に従事されています。4月より大阪大学の倉智嘉久先生の研究室から徳留健太郎先生が助教として着任しました。徳留先生は大阪薬科大学の大野行弘教授の下で学位を取得され、その後倉智研で研鑽を積んでこられた若手神経薬理学者です。循環薬理学が主流の当教室ではありますが、徳留先生のこれまでの研究経験は今後の臓器連関の研究など分野複合的な研究にも貢献されると確信しております。泌尿器科学から派遣されてきた西出峻治先生の研究論文が、松永慎司先生の指導の下、受理されました。西出先生は、着任以降のはじめての大学院生です。研究開始から論文受理まで約3年という短い時間でしたが、その研究成果はiScience誌に掲載されました。研究内容に対する興味と日頃の研究に対する真摯な取り組みが成果に結びついたと思います。4月より寒川訓明君が大学院博士課程に入学してきました。寒川君は生薬の卸会社に5年勤務していましたが、将来生薬に関する研究に携わることを目指して再び学び舎の門をたたいてきた熱意ある学生です。さらに10月より泌尿器科学から山口一行先生が研究に参加しています。山口先生と最初に出会ったのは私が徳島大学の玉置俊晃先生のもとで准教授をしていた時で、彼は研究室配属（修業実習）の学生としてやってきました。この様な形で再会するとは思いませんでした。これからの研究活動に期待しています。

さて教室の活動としては、6月には三浦先生の退任記念祝賀会を、塩田正之先生を中心に執り行いました。多くの洽楽会会員皆様に参加していただきました。また8月には市大フォーラムを開催し、大阪医大、大阪大谷大、大阪薬科大、香川大、金沢医大、関西医大、徳島大、鳥取大、奈良医大、兵庫医療大、三重大の本教室に関連のある先生方が集まり親睦を暖めました。また、11月には第17回がん＆ハイポキシア研究会を大阪市大で開催し、全国より関係の研究者が集いました。これからも「山椒は小粒でもぴりりと辛い」研究のできる教室にして参りたいと思います。引き続き洽楽会の皆様にはご指導ご鞭撻賜りますよ

う宜しくお願い申し上げます。

最後に、私事ですが、11月に母が他界いたしました。葬儀の折には洽楽会より供花・弔電を賜り誠に有り難うございました。謹んでお受けいたし霊前に飾らせていただきました。この場をお借りして御礼申し上げます。

皆さまにおかれましてはよいお年をお迎えくださるようお祈り申し上げます。

40 年を振り返って

三浦 克之

25歳で大学を卒業して以来、米国留学の2年半を除いてずっと大阪市立大学で過ごさせて頂きました。その間、薬理学教室も山本研二郎教授から、岩尾洋教授、そして富田修平教授に引き継がれていくのを間近に見て参りました。医学部卒業時にはクラブを含め何人かの先輩方から入局のお誘いを受けたのは大変有り難かったのですが、自分自身、何を目指せば良いのかも判らぬままに修業実習でお世話になった薬理の安部先生の所に相談に行ったんです。先生からの「4年間大学院で研究してから考えたら良いのでは」との言葉につられて薬理の大学院に進んだのですが、まさか、定年までこの大学の同じ分野に居続けるとは想像もしていませんでした。

大学院入学時には3年上に雪村先生、川村先生、小森先生が、1年上には今西先生、高折先生がおられて、研究に励んでおられました。何れの方も私同様、市大医学部卒業後、直ちに薬理学教室に進まれていました。また、その年の春に大学院を修了した岡村先生が米国バンダービルト大学への留学を控え準備されていました。これだけ多くの学年の近いMDが薬理学の院生としていたのは恐らく他大学では見られなかったのではないのでしょうか。翌年、ミシガン州立大学での留学を終えた岩尾先生が教室に戻ってこられました。岩尾先生は5年上の先輩です。さらに3年上の岡原先生も教員として院生の指導に当たっていました。教室は山本教授のもと、安部助教授、池本講師、岡原助手、岩尾助手が教育・研究に取り組んでおられました。当時は皆、研究にも熱心でしたし、その中で私も多くの勉強をさせて頂きましたが、遊びにも精力的で、平日ゴルフを楽しみながら、時間を見つければパチンコ、麻雀、院内野球大会と何事にも一所懸命だったのは今でも大変懐かしく思い出されます。私が院生2年の終わり頃に安部先生は香川医大の教授に就任され、さらに岡原先生も香川医大に移って行かれました。

大学院修了後は岩尾先生がミシガン州立大学で知り合われた Hook 教授の下に留学することになったのですが、Hook 先生は直前に当時タガメットを開発した SmithKline&French 研究所という製薬会社に移ったので、私もそちらの方に留学先を変更することになりました。Philadelphia の郊外に研究所があり、近くには独立戦争で宿营地となった公園があり、のんびりした環境の中で過ごすことが出来ました（研究は当初、思ったようにいかず、苦戦の連続でしたが、今から思い出すと楽しい思い出です）。

1985 年に帰国後は薬理学教室に助手として採用してもらい、また 2001 年には新しく出来た薬効安全性学教室を担当させていただくことになり今春に任期満了となった次第です。その間、先輩や仲間の先生方には色々と教わりながら、また臨床から来てくれた多くの院生の指導に関わることが出来ました。研究で扱う対象はマルゴトのイヌの実験から、ラットに、さらに遺伝子を改変したマウスへと変わって行きましたが、そのタイミングは常に周回遅れであったようです。定年前の 2 年間は動物実験施設の施設長を任され、遺伝子改変の技術を持った遺伝子制御学の准教授にタイミング良く実験動物施設の専任教員となってもらえることになり、ゲノム編集技術を用いたマウスの遺伝子改変サービスや精子、胚の凍結保存を安価で提供できるようにしました。これによって研究を始めたばかりの人でもいろんな分子の働きを知るために気軽に遺伝子改変動物を作成し研究できるような環境を作ることが出来たことで、周回遅れの言い訳ができないような環境を作ることができたと勝手に思っています。

先日、山中伸弥先生と食事をする機会がありました。山中先生の整形外科時代の恩師の大久保先生、大久保先生のスキー部の後輩でもある雪村先生と食事をするということで誘ってもらいました（写真）。この大久保先生こそ、山中先生に薬理の大学院を強く勧めてくれた先生です。そして、大久保先生の研究の手ほどきをされたのが安部陽一先生で、その研究成果は整形外科の欧文一流誌に掲載されたことが山中先生と薬理との関わりに繋がって行くわけです。



人と人との繋がりというのはまた別の所に影響をしていくものです。大学院に入った頃、岡原先生は今西先生と一緒に腎臓の prostaglandin が renin 分泌を促進するように働いていることを明らかにする研究をしていました。Prostaglandin の測定は自作の硅胶カラムで分離してから radioimmunoassay にて測定と大変手間暇のかかる実験でした。10 年経って今西先生は国立循環器病センターにおいて腎血管性高血圧症患者では prostaglandin E₂ が renin 分泌促進的に働くことを狭窄腎から遊離される prostaglandin E₂ の定量で示されました。雪村先生は Endothelin の作用に Prostaglandin が関わることを見つけ、その折りには、今西先生には Prostaglandin の抽出法を教えてもらい、さらに化学研究室の舩江先生や今岡先生に HPLC での分離法を指導してもらい、種々の prostanoid の血中濃度測定を確立することが出来るようになりました。山中先生が講演でしばしば紹介する「予想外の実験結果で興奮した」というのは血小板活性化因子によって prostaglandin E₂, I₂, Thromboxane の血中濃度が著増するとともに血圧の低下が起きること、ところが、この時に Thromboxane だけの産生を選択的に抑えると予想もしない著しい血圧の低下増強が見られた経験についてのことです。実際に測定してみると Thromboxane の血中濃度は抑えられるのですが、その分 prostaglandin E₂, I₂ の増加が著しく増強されることで血圧低下増強を明快に説明することができました。岡原先生が始めた研究がいろんな形で引き継がれた結果は、そのうちの誰かが欠けていてもスムーズに繋がらず別の展開になっていたのかも知れないなあとと思うと、やはり、それぞれの人の繋がりというものはいろんな結果を生んでいくんだなあと、感慨深いものです。

楽しいこと、悲しかったこと、嬉しかったこと、悔しかったこと、多々経験させてもらいました。スタンド型の無影灯で感電して生命の危険を感じたこともありました（集会室にいた人は誰か大声を出している人がいるなあと断っていました）。ともあれ大学を卒業して 40 年、何とか無事に大学生活を終えることが出来ました。

今春より縁あって一般病院に職を得ることとなり健診や治療の活性化を手伝うことになりました。何と、そこには今西先生が副院長で、また学位指導した立石先生が腎臓内科の部長と、これまた、人と人の繋がり、縁というものは不思議なものですが、私にとっては本当に有り難いものです。

ぼくの読んだ本

雪村 時人

石坂洋二郎の「青い山脈」は劇的な青春と恋愛だった。自分の青春には成就しなかった平凡な恋であったような気がする。とるに足りないものだったけれども、自分に何物かを与えてくれたはずである。年をとったとは思わない、何十年も前からずっと変わらない自分があるのだから。ただ解決できないままの問題がたくさん残ってしまうとすれば困ったものだ。驚は白い、カラスは黒い、変わることも変えることもできない。むつかしく考えたくない、おそらくは人生は本当はもっとずっと簡単なものなのだろうから。何よりも快活でいたい。

志賀直哉の「暗夜行路」では、一途だけど一筋縄ではどうにもならない異性へのおとなの恋が描かれていた。当時中学生には難解であったようだが、ただこの世界は不思議というより神秘的であった。なかで屋根に上った少年に、必死な思いを抱きながら少年の母親がやさし気に声かけしている深刻な場面があった。中学の先生が授業で、この母親の思いをとりあげたが、ぼくには、屋根に上った少年の目にはどのような景色が見えたのかが気がかりだった。高いところというと、「徒然草」の木登りの名人は、弟子が高い木に登って枝を切っている時にはだまっていて、低くなってから「気をつけろ」と言葉をかけた。高いところでは自分で注意する、低いところで間違いが起るものだとのことだった。高いところから少年の、木登りの弟子の視線は遠くに向けられ、そこに誰も目にするものがない世界が見えていた、見渡す景色の新しさというものが僕らの探し求めたところでないのか。

クローニンの「城砦」に描かれたのは、貧しくも情熱をもつ青年医師が研究に取り組み人々の健康を守ろうとする使命感であった。やがて世間の荒波に揉まれ、世俗的な富とか成功の板ばさみになって悩むようになる。衛生学を学びたいと本当に思った。「白い巨塔」の山崎豊子はきっとこれを読んでいた。「城砦」は薬理の講義のなかで玄番先生が紹介されたもので、医師の仕事の意味を考えさせていただいた。6年生の夏、友人と公衆衛生学教室のフィールドワークへの参加の契機ともなった。この時には文字通り耳にタコができるほど血圧を測り、何十枚も眼底写真を撮影し、多くのデータを手にしたのに、この研究の意義に関心を示すことができずにいた自身のことしか思い出せない。

宮本輝はおすすめでと奥村先生が言うてくれた。宮本輝が多くの作品に示したのは「清楚」とか「たくましさ」というものの大切さであったように思う。「いさぎよさ」かもしれない。人生をどう生きて行くことができるかを考え

たのかもしれない。広大な自然の中にわれわれは生かされているのだろう。シルクロードを旅する一人の中年男性の瞳の清冽な輝きは「草原の椅子」の書き出しだった。「骸骨ビルの庭」には人々の善意がいろんな形でこれでもかと現れてきて喜ばせてくれた。手紙だけで男女の思いが語られたのが「錦繡」だった。散逸してしまったのも多いのだけれど、何度も、今夜も読み返している、今夜は「人間の幸福」。

かたくなに信じるものだけ見つめ、人の理解をあえて求めず、たくましくまっすぐに進もうとするしゃにむにさにあこがれていた。今はただ、時日の経過することだけを静かにながめたい。自分のまわりの人たちによろこびや幸福をもたらしたいと思っていますのでよろしく。



着任のご挨拶

徳留 健太郎

本年4月より分子病態薬理学の助教に着任いたしました、徳留健太郎と申します。現在の薬理学教室では、低酸素を中心テーマに様々な分野の研究が行われておりますが、新たに中枢神経の領域を立ち上げるため、私は恩師である大野行弘教授（大阪薬科大学薬品作用解析学）の紹介で、大阪大学より移動して参りました。私自身は大阪薬科大学の出身であり、同大学院の大野教授の下で、神経伝達物質の遊離に着目した神経精神疾患に関する薬理研究を行い、平成29年3月に学位を取得しました。その後、同年4月より倉智嘉久教授（大阪大学大学院医学系研究科分子・細胞薬理学教室）の下で、教授退官までの2年間、細胞内のイオン動態に関する研究プロジェクトに携わりました。大阪大学では、蛍光蛋白質 GFP をベースにした細胞内 pH と Cl^- の同時測定実験の立ち上げとその確立に従事し、大野教授の下では学べなかった遺伝子工学実験や分光光学的手法等を習得させていただきました。一度中枢薬理の研究分野から離れ、最初のうちは大変苦勞をしましたが、大学院時代から取り組みたいと思っていた生化学系の研究にも少しずつではありますが、慣れて始め、さらには、様々な技術の習得に取り組みたいと思うように変わっていきました。

大阪市立大学の分子病態薬理学教室は、大学生時代から参加させていただいていた市大フォーラムのイメージが私の中では印象強く、今でも私はその時のことを覚えております。今年は着任して初めて市大フォーラムの運営側を担当させていただいて、今まで参加者側だったこの研究会の運営スタッフとなったことを感慨深かったのを記憶しております。改めて、深い縁を感じております。

着任して半年過ぎましたが、私は再び中枢神経疾患をテーマにした研究ができることに感謝しつつ、毎日実験に従事しております。学位を取得して日が浅いため、教育者としても研究者としてもまだまだ未熟で、多く先生方に迷惑をかけてしまう場面も多いですが、何かしらの形でいずれは薬理学教室に貢献したいと考えております。

最後になりますが、私の大阪市立大学での目標は、大阪大学で苦勞した生化学研究を自分の新たな武器として、立派な研究者に少しでも近づけるように頑張ります。こんな私ですが、ご指導ご鞭撻の程、何卒宜しくお願い致します。

新入生紹介

寒川 訓明

はじめまして、今年の 4 月から薬理学教室の博士課程の大学院生としてお世話になっております寒川訓明と申します。

私は、平成 26 年に大阪薬科大学を卒業したのち、平成 28 年に同大学大学院の修士過程を修了しました。修士課程では、生体内の活性酸素の分析法について研究しておりました。

私の実家は、漢方薬局を営み、私自身幼い頃から生薬に触れてきたこともあり、卒業後は、生薬・漢方の卸メーカーである株式会社栃本天海堂に就職しました。会社では、生薬の成分分析や新規分析法の開発に携わっていましたが、2 年目の半ばにふと、「この成分は何に効くんやろか？」という疑問から、紅参研究を行っている大阪市立大学大学院薬理学教室への入学を希望し、大学院入学試験を受験しました。上司からは「試験に落ちたら、ずっとここで働いたらいい。」という優しい(?) 言葉をいただきながらも、無事に入学することができました。

入学からの約 8 ヶ月を振り返ってみると、毎日が充実しており、あっという間に過ぎた印象です。まだ、自分の手技に自信が持てず、何度もプロトコールを確認しながら実験を進めておりますが、冨田教授をはじめとする薬理学教室の先生方のご指導のおかげで、ゆっくりながらもなんとか研究を進めることができていると思っております。また、私の指導教員であります山口雄大先生には、時に厳しく(かなり恐ろしい)も優しさ(よくご飯に連れてってくれます)のある指導からは、研究者としてだけでなく人としても尊敬でき、そういう人の元で研究生生活を送れるといった恵まれた環境です。

大学院生活が始まって 1 年目で、これからも先生方にはご迷惑を多々おかけするかと思いますが、少しでも多くのことを吸収したいと思っておりますので、ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願いいたします。

第 26 回市大フォーラム

2019 年 8 月 21 日（水）大阪市立大学医学部学舎 4 階中講義室 1 にて、市大フォーラムを開催致しました。皆様のお陰をもちまして、御出席者 33 名、発表演題 11 題の盛会となりました。本年も暑いなか、また遠方より御参加いただきました先生方に御礼申し上げます。

プログラム（敬称略）

12:30-12:35 開会宣言

座長：田和 正志（金沢大学 薬理学講座）

1. 12:35-12:55 香川大学医学部 薬理学

森澤紀彦

高食塩摂取時の腎交感神経の役割

2. 12:55-13:15 大阪薬科大学 病態分子薬理学研究室

中川恵輔

虚血性急性腎障害に併発する血管内皮機能障害について

座長：山口 雄大（大阪市立大学大学院医学研究科 分子病態薬理学）

3. 13:15-13:35 鳥取大学医学部 薬理学・薬物療法学教室

澤野達哉

肥満インスリン抵抗性モデルラットにおける不整脈の検討

4. 13:35-13:55 徳島大学大学院医歯薬学研究部 薬理学分野

池田康将

胃酸分泌抑制薬はヘプシジンを介して鉄吸収を抑制する

座長：中野 大介（香川大学医学部 薬理学）

5. 13:55-14:15 鳥取大学医学部 薬理学・薬物療法学教室

市原克則

銅のキレート剤は高脂肪食による肥満と耐糖能異常を抑制する

6. 14:15-14:35 徳島大学大学院医歯薬学研究部薬学域医薬品機能生化学分野
友成奈央実
肝臓における食後 AMPK 活性制御メカニズムの解明

14:35-14:55 BREAK

座長：三明 淳一郎（鳥取大学医学部 薬理学・薬物療法学教室）

7. 14:55-15:15 奈良県立医科大学医学部 薬理学講座
中平毅一
ミトコンドリアが自然免疫に及ぼす影響

8. 15:15-15:35 大阪大谷大学薬学部 臨床薬理学講座
下川隆臣
ロリクリンノックアウトマウスを用いた新規アトピー性皮膚
炎モデルの作製

座長：松永 慎司（大阪市立大学大学院医学研究科 分子病態薬理学）

9. 15:35-15:55 大阪薬科大学 薬品作用解析学研究室
國澤直史
振戦およびけいれん発作発現におけるニコチン受容体の役割

10. 15:55-16:15 徳島大学大学院医歯薬学研究部薬学域医薬品機能生化学分野
高橋千明
脳内グリコーゲンによる代謝調節効果の検討

座長：富田 修平（大阪市立大学大学院医学研究科 分子病態薬理学）

11. 16:15-16:35 三重大学大学院医学系研究科 統合薬理学
西村有平
神経発達における C3orf70 の機能解析

16:35-17:00 閉会宣言

論文業績 (2019 年)

1. Yamaguchi T, Watanabe A, Tanaka M, Shiota M, Osada-Oka M, Sano S, Yoshiyama M, Miura K, Kitajima S, Matsunaga S, Tomita S, Iwao H, Izumi Y: A dipeptidyl peptidase-4 (DPP-4) inhibitor, linagliptin, attenuates cardiac dysfunction after myocardial infarction independently of DPP-4. *J Pharmacol Sci* 139:112-119 (2019). doi: 10.1016/j.jphs.2018.12.004.
2. Nishide S, Matsunaga S, Shiota M, Yamaguchi T, Kitajima S, Maekawa Y, Takeda N, Tomura M, Uchida J, Miura K, Nakatani T, Tomita S: Controlling the Phenotype of Tumor-Infiltrating Macrophages via the PHD-HIF Axis Inhibits Tumor Growth in a Mouse Model. *iScience*, 19:940-954 (2019). doi: 10.1016/j.isci.2019.08.033.
3. Osada-Oka M, Goda N, Saiga H, Yamamoto M, Takeda K, Ozeki Y, Yamaguchi T, Soga T, Tateishi Y, Miura K, Okuzaki D, Kobayashi K, Matsumoto S. Metabolic adaptation to glycolysis is a basic defense mechanism of macrophages for *Mycobacterium tuberculosis* infection. *Int Immunol*. 2019 Nov 8;31(12):781-793.
4. Takada K, Kashiwagi S, Asano Y, Goto W, Takahashi K, Fujita H, Takashima T, Tomita S, Hirakawa K, Ohira M: Clinical verification of the relationship between smoking and the immune microenvironment of breast cancer. *J Transl Med* 17:13 (2019). doi: 10.1186/s12967-019-1773-y.
5. Takada K, Kashiwagi S, Asano Y, Goto W, Takahashi K, Shibutani M, Amano R, Takashima T, Tomita S, Hirakawa K, Ohira M: Prognostic Value of Quality of Life in Endocrine Therapy for Elderly Patients With Breast Cancer: A Retrospective Study. *Anticancer Res* 39:2941-2950 (2019). doi: 10.21873/anticancer.13424.
6. Takada K, Kashiwagi S, Asano Y, Goto W, Takahashi K, Fujita H, Takashima T, Tomita S, Hirakawa K, Ohira M: Verification of the effects of calcium channel blockers on the immune microenvironment of breast cancer. *BMC Cancer* 19:615 (2019). doi: 10.1186/s12885-019-5828-5.
7. Nakatani K, Nakagami-Yamaguchi E, Shinoda Y, Tomita S, Nakatani T: Improving the safety of high-concentration potassium chloride injection. *BMJ Open Qual* 8:e000666 (2019). doi: 10.1136/bmjoq-2019-000666. eCollection 2019.

8. Kashiwagi S, Asano Y, Takahashi K, Shibutani M, Amano R, Tomita S, Hirakawa K, Ohira M: Clinical Outcomes of Recombinant Human-soluble Thrombomodulin Treatment for Disseminated Intravascular Coagulation in Solid Tumors. *Anticancer Res* 39:2259-2264 (2019). doi: 10.21873/anticancer.13342.
9. Goto W, Kashiwagi S, Asano Y, Takada K, Takahashi K, Fujita H, Takashima T, Shibutani M, Amano R, Tomita S, Hirakawa K, Ohira M: The Effects of Eribulin on Breast Cancer Microenvironment Identified Using Eribulin-resistant Breast Cancer Cell Lines. *Anticancer Res* 39:4031-4041 (2019). doi: 10.21873/anticancer.13559.
10. Takada K, Kashiwagi S, Asano Y, Goto W, Takahashi K, Shibutani M, Amano R, Takashima T, Tomita S, Hirakawa K, Ohira M: Clinical Evaluation of Dynamic Monitoring of Neutrophil-to-lymphocyte and Platelet-to-lymphocyte Ratios in Primary Endocrine Therapy for Advanced Breast Cancer. *Anticancer Res* 39:5581-5588 (2019). doi: 10.21873/anticancer.13752.
11. Ishikawa H, Izumiya Y, Shibata A, Ichikawa Y, Yamaguchi T, Yamaguchi Y, Kitada R, Iwata S, Ehara S, Tomita S, Hanatani A, Yoshiyama M: Soluble urokinase-type plasminogen activator receptor represents exercise tolerance and predicts adverse cardiac events in patients with heart failure. *Heart Vessels* 18: (2019). doi: 10.1007/s00380-019-01538-3.
12. Nakagawa T, Furukawa Y, Hayashi T, Nomura A, Yokoe S, Moriwaki K, Kato R, Ijiri Y, Yamaguchi T, Izumi Y, Yoshiyama M, Asahi M. Augmented O-GlcNAcylation attenuates intermittent hypoxia-induced cardiac remodeling through the suppression of NFAT and NF- κ B activities in mice. *Hypertens Res*. 2019

学会・研究会発表（2019 年）

第 48 回日本心脈管作動物質学会、2 月 7-8 日、富山

リナグリプチンは dipeptidyl peptidase-4 非依存的に心筋梗塞後のリモデリングを抑制する（ポスター）

山口 雄大

第 92 回日本薬理学会年会、3 月 14-16 日、大阪

PHD 阻害薬によるがん微小環境と腫瘍免疫への影響（シンポジウム）

腫瘍環境改変によるマクロファージ活性化機構の解明（ポスター）

松永 慎司

Percutaneous Treatment of Carbon Dioxide Gas Mist Suppresses the Development of Right Ventricular Dysfunction in Monocrotaline-Induced Pulmonary Hypertensive Rats（ポスター）

山口 雄大

第 92 回日本細菌学会総会、4 月 23-25 日、北海道

Exploring the Role of Mycobacterial Membrane Vesicles toward Vaccine Development

山口 雄大

第 17 回がんとハイポキシア研究会、11 月 16-17 日、大阪

担癌モデルマウスに対する PHD 阻害剤の効果検討（ポスター）

松永慎司

2019 年 今年の出来事

3 月

- ・三浦克之教授が定年退職されました。長い間、本当におつかれさまでした。



4 月

- ・大阪大学大学院医学系研究科分子・細胞薬理学教室より、徳留健太郎先生が助教として着任され、大学院博士課程に寒川訓明さんが入学されました。よろしく願いいたします。

6 月

- ・三浦克之教授の退職記念祝賀会を開催しました。山本先生をはじめ、多くの先生方のご参加の下、盛会のうちに終了しました。ご参加いただいた皆さまありがとうございました。





三浦克之教授退職記念祝賀会 2019年6月8日 於 リーガロイヤルホテル

8 月

- ・第 26 回市大フォーラムを 14 教室参加のもと開催いたしました。
暑い中、多数ご参加いただき、活発なご討議をありがとうございました。



9 月

- ・西出峻治先生の学位論文が出来上がりました。おつかれさまでした。

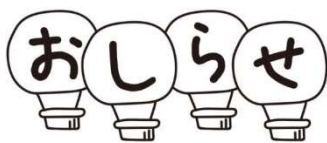


10 月

- ・泌尿器病態学所属の山口一行先生が学位取得の基礎研究のため出向して来られました。どうぞよろしく願いいたします。

11月

・11/16-17 にがんとハイボキシア研究会を市大学舎大講義室にて開催いたしました。ご協力いただきました先生方、誠にありがとうございました。



薬理学教室のホームページを開設いたしました。

洽楽会の写真、過去の会誌などがご覧になれます。今後も内容の充実を図ってまいりますので、アドバイスをいただければ幸甚に存じます。

URL : <http://www.med.osaka-cu.ac.jp/dept-pharmacology/>

洽楽会のページに入るパスワードは下記の通りです。

yakuri-ocu1949

